

子供の命を守りたい

2010.08.04

ようやく暑くなったと思った函館ですが、雨が降ったり寒い日があったりと天候不順が続いて、喘息を持っているお子さんには受難の日々がつづいているようです。おたふくかぜは相変わらず流行しており、夏かぜのヘルパンギーナもこの時期に流行するのは6年ぶり、夏を楽しく過ごすにはちょっと辛いことも待っているようです。

大阪で二人のお子さんが放置され、息絶えて見つかるという悲しい事件がありました。報道によれば、母の父親も子供にはネグレクト（育児放棄）状態だったようで、子供をいとおしく育てたいという母の切ない気持ちは、根っこの部分では脆いものだったのかも知れません。

私が函館の地で虐待防止の取り組みを始めて10年が経ちました。多くの事例を見、あるいは虐待を受けた子を実際に診療して感じることは、虐待をしてしまう親を非難したり評論したりすることはとても簡単なことですが、気になるのはその親子を周りで見ているであろう住民のあまりにも子供の育ちに対して無関心であることと、コミュニティとしての接し方の悪さです。函館周辺に限ったことではなく、これは全国的にそうなのですが、大変困った現状です。ましてや虐待防止活動の始まりの地である大阪でこのような事件が起きるとは、社会そのものが不健全な方向に進んでいるようにしか思えません。

子供虐待はどんな家庭にも起こります。経済的な要因はありますが、恵まれて社会的地位のある方の家庭にも起きますので、学歴や職業にはあまり関係がありません。家庭の中でどんなに虐待が起きても、子供の信じるものはその虐待をしているはずの父であり、母です。大阪で息絶えたお子さんも最後に発した言葉はきっと「ママ～」だったのでしょう。

そんな母にも近くに見守ってくれる地域の住人がいれば、きっと支えになり、心のなかにその人の顔や言葉が息づいていてくれて、悲惨な事件を起こす前にきっと留まってくれたものだと思います。かよわい子供の命を守るのは、この紙面を読んでもらっているあなた自身です。ぜひ今日から温かいまなざしと言葉がけをお願いいたします。